



この僕にできること

神戸市立青陽東養護学校 2年

大石 桂佑

僕はいつも消していく。僕の過去を。振り返るのが怖い。嫌な思い出、だめだった自分：思い出したくない。よかったこと、好きだった人を思い出すこともしない。今、その人達がそばにいないことが、僕の心を簡単に折ってしまう。心が折れる音が聞える。ポキン……。四歳の時に父が亡くなった。それもわからない。母にもちゃんと聞いていない。

今でも僕は、いつも思い出を消している。学校でつくった作品も、毎日書いた連絡帳も、捨てていく。残しておくのが怖い。辛い。

僕は忘れていく。覚えるのが苦手だ。だから勉強が全然できない。ひどい点数のテスト。それをみんながどう思うのか。考えると学校に行けなくなった。中学校では特別支援学級で教えてもらった。それでも学校にはなかなか行けずに、家で泣いてばかりいた。中学校を卒業して一年が経っても。僕はこんな自分が嫌だった。情けなかった。悔しかった。

母と相談して、青陽東養護学校に入学することになった。入学前の見学では、この学校が嫌でたまらなかった。けれど、他に行く場所がなかった。

でも：、僕はここで初めて知った。話したくても話せない友だちがいること。走りたくても走れない、書きたくても書けない、自分の気持ちを表現できない友だちがたくさんいることを。僕はみんなの手助けをするようになった。みんなの役に立てることが嬉しくなった。そしてみんなを好きになった。

僕は気づいた。僕は、話せる、書ける、走れるって。この僕にもできることがあるって。

不安だった僕がずっと欲しかった生きる目的。ぶれない心。それはきつと、誰かの役に立てる喜び。

だから僕は書くことにした。この作文を。消してきた過去。忘れていく自分の歴史。残しておこう。閉じこもってばかりいた失敗から苦しくて情けなかった自分が手に入れたこの喜びを僕はもう消さない。